

聖隷が目指す国際バカロレア教育について

鈴木 光男¹⁾ 太田 雅子¹⁾ 飯田 真也¹⁾ 福重 浩之¹⁾
和久田 佳代¹⁾ 細田 直哉¹⁾ 二宮 貴之¹⁾

1) 聖隷クリストファー大学

Toward the introduction of International Baccalaureate education at Seirei

Mitsuo SUZUKI¹⁾ Masako OTA¹⁾ Shinya IIDA¹⁾ Hiroyuki FUKUSHIGE¹⁾
Kayo WAKUDA¹⁾ Naoya HOSODA¹⁾ Takayuki NINOMIYA¹⁾

1) Seirei Christopher University

抄録

聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科は、2019年度より小学校教員養成課程を設置した。さらに新しい時代に求められる資質・能力を児童が身に付けられるよう大学の教育課程に「国際バカロレア（以下、IB）」関連の科目を置き、主体性や国際的な視点を持った全人教育を推進する教員養成を目指すことにした。

IB教育は、知識や人格のバランスがとれた世界的に通用する人材を育成することを目的としている。この教育内容を理解するために、本学では研究会・講演会開催や国際バカロレア教育学会に参加することを年間通じて計画・実行してきた。本報告は、こうした研究会や学会を通して学習・考察した内容についてまとめていくものである。

そうすることで、IB教育と本学の教育や授業との関係を整理し、IBに関する理解を教員全員で深め、本学科の教育の独自性や特色ある内容について検討・創造していく第一歩とするものである。

キーワード：国際バカロレア教育、TOK、CAS、アクティブラーニング

Key words：International Baccalaureate, TOK, CAS, Active Learning

1. はじめに

聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科は、2019年度より小学校教員養成課程を設置した。さらに新しい時代に求められる資質・能力を児童が身に付けられるよう、大学の教育課程に「国際バカロレア（以下、IB）」関連の科目を置き、主体性や国際的な視点を持った全人教育を推進する教員養成を目指すことにした。そこでIB教育に関して教員全体で理解を深め、本学科の教育の独自性や特色ある内容について検討・創造していくものである。

IB教育は、知識や人格のバランスがとれた世界的に通用する人材を育成することを目的としている。また、文部科学省が掲げる「生きる力」やこれからの時代に求められる「自ら探究する学習者」の育ちを支える具体的方法を提示している。この教育内容を理解するために、研究会・講演会開催や国際バカロレア教育学会に参加することを年間通じて計画・実行してきた。本報告は、こうした研究会や学会を通して学習・考察した内容についてまとめていくものである。

1-1. 聖隷の教育とIBの共通点

聖隷クリストファー大学の基本理念は「生命の尊厳と隣人愛」である。「隣人愛」とは、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」という聖書に示された教えである。創立以来この教育理念をもとに、保健医療・福祉・教育（保育）分野の専門職の育成に取り組んでいる。目の前で苦しんでいる結核患者のために、自分自身が感染するかもしれないというリスクがある中、その上無報酬でありながらも真心を込めて患者たちの世話をを行ったことが聖隷の始まりである（1930年）。本学では、この愛と奉仕の精神を受け継ぎ、地域や国際社会に貢献できる

専門職を育成している。これはIBが強調する奉仕（service）の学習と共通している。また、聖隷福祉事業団の歴史を辿ると、1997年にベトナム難民（ベトナム戦争時ボートピープルとして日本への仮上陸を許可された）を受け入れ、定住に向けた「愛光寮」の取り組みなど注目に値するものである。難民問題に消極姿勢を取り続ける日本の中で、人権擁護のためにいち早く積極的行動を取った。こうした姿勢は国際的な視野を持ち、平和な世界を築くことに貢献する人間を育成することを目標に掲げるIBの学習者像に繋がる。

現在の聖隷クリストファー大学における教育の重点課題は、大学教育における国際化の推進であり、グローバル＝グローバルに考え、ローカルに行動することをモットーとし、新たなグローバル教育のカリキュラム開発である。この点においてもIBと結びつく。

1-2. 浜松の地域性とIB

本学が位置する浜松には世界的イノベーションが生まれる風土がある。新しいものを創造する気風「やらまいか」精神がある。これは、「やってみよう」「やってみようじゃないか」を意味し、新しいことに果敢にチャレンジする精神を表している。事実、世界的企業が生まれている。ホンダの本田宗一郎、スズキの鈴木道雄、トヨタの豊田佐吉、ヤマハの川上源一などグローバルでイノベティブな人材が育っている。生まれ育つ場としての風土は、そこに生きる人々との相互関係の中で培われ、ものの考え方や姿勢が形成される。IBの学習者としての目標が探究する人、挑戦する人など浜松という地域に浸透している精神と一致している。この風土の中で育つ子供たちにとってIB教育は親和性が高いと思われる。（文責：太田雅子）

2. IB 教育と目指す授業像

2-1. 近代教育(印刷術)vs.IB 教育(構成主義)

学校の授業をイメージする時、私たちが通常思い浮かべるのは「一斉授業」と呼ばれる授業形態だろう。この形態を最初に構想したのは近代教育学の父コメニウスである¹。「あらゆる人にあらゆる事柄を教授する普遍的技法」として、彼がこの授業形態を提起したのは、最大の宗教戦争とされる三十年戦争の最中であった。あらゆる人に同じ正しい知識を授けることができれば、人々の対立は解消され、平和な世界が実現されると考え、その希望を教育に託したのだ。

IB 教育もまた「より平和な世界を築くことに貢献する」²ことを目的として構想された教育プログラムである。しかし、それが目指すところはコメニウスとは正反対のように見える。IB 教育が目指すのは、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがありうると認めることのできる人」³の育成である。教育を通して平和な世界を実現しようとする動機は同じでも、目指すところがこのように正反対になるのはなぜだろうか。

おそらく、それは両者が基礎に置いている学習観が異なるためである。

コメニウスは一斉授業を当時の先端技術であった印刷術とのアナロジーで構想している。学校教育は「印刷機」、子供は「白紙」、教科書は「活字」、教師の声は「インク」としてこの学習を説明しているのである⁴。この図式によれば、教育の主体は「正しい知識」をもった教師であり、それをいかに正確に、いかに効率よく子供に印刷＝教えるかが教師の専門性となる。そして、子供はその「正しい知識」をそのまま受け入れるだけの受動的な存在とみなされ

る。

それに対して、IB 教育の基礎にあるのは、学習者である子供を環境に働きかけ、他者と対話しつつ、自らの知識と理解を構成している能動的な存在とみる構成主義的な学習観である⁵。この学習観によれば、人々の考え方に違いがあることは当然であり、むしろ、そうした違いを出発点として対話することによって、自分一人では認識できない世界の多様な側面について学ぶことができると考えられている。

2-2. 「教える専門家」vs. 「学びの専門家」

構成主義的な学習観を基礎にした IB 教育では、学びの過程こそが教育活動の中心になる。すると、教師の役割も変わる。「教える専門家」ではなく「学びの専門家」として子供の学びの過程を促進できるファシリテーターの力が求められるのである。

教師の意識の焦点は、自らの教授過程ではなく、子供の学びの過程に向けられる。子供一人ひとりについて、どこで学びが生じ、どこで学びがつかずいているのかを見て取り、適切なタイミングと方法でその過程を支えられる力が必要になるのである。

こうした教師（保育者）の専門性は、事例研究を中心に養成される。医師においては臨床研究、弁護士においては判例研究が学びの中心であると同様、最適解がない複雑かつ個別の文脈において発揮される教師の専門性の養成には、学びの共同体を形成し、その中で具体的な事例に基づき互いに学び合うことが専門性を高める鍵になる。

2-3. 本学の授業との関連

しかしながら、教師（保育者）の専門性を実際の子供のいない大学の教室で養成できると考えることには「畳上の水練」にも似た不完全さがあることは否めない。

そこで筆者が担当する授業においては以下のような工夫を導入することで、その不完全さを補い、現実の場面でも応用可能な専門性の養成を心がけている。

- ①保育場面の動画の視聴と議論
- ②学内の子育て支援ひろばの活用
- ③大学附属園における観察および実践
- ④保護者への通信の形での授業レポート

(文責：細田直哉)

3. さまざまな国際教育・支援プログラム

3-1. 「インド聖隷希望の家」でのALや実習

聖隷グループのひとつである「インド聖隷希望の家」は本学国際支援アクティブラーニング(以下、AL)及び国際福祉実習先である。インドのケララ州にある知的障がい児者施設である。

国際支援ALでは、インド聖隷希望の家の働きや支援のためのニーズを理解して、自分たちができる支援方法を検討・計画して実践することを目的としている。インターネット等を用いて施設長・利用者と対話をしながら現状理解を行い、支援計画を作成・実行(支援物資協力の呼びかけ、受取・送付等)しようとするものである。

国際福祉実習においては、以下を目的としている。①聖隷の理念に基づくインドでの社会福祉事業の展開について理解する。②インドの社会福祉の現状や文化について体験的に学び、国際的視野を養う。③価値観の多様性や異文化を受容しながら福祉職として必要な知識・技能、態度を身につけ、その任務と使命を理解する。④日本の社会福祉の概要について実習先の人々に説明したり議論したりする。

3-2. 国際教育実習(2020年度から実施予定)

オーストラリア・ゴールドコーストにある「インマヌエルカレッジ」が実習先である。オーストラリアの教育・保育の課題・カリキュラム・テキスト、教材などについてディスカッションを通して理解する。また、クラスルームに入って実際の授業・保育に参加して教師の役割を理解すること、子供たちとの交流を図ることをねらっている。

さらに、学生が日本文化を教材として、指導計画を作成し、実際に保育・授業を展開することを行う。

3-3. 海外研修・こども教育福祉学科

アメリカ・シアトルにある「シアトル・パシフィック大学」において研修を行う。相互交流のプログラムである。学生はレクチャーやディスカッションによって互いの教育方法の違い、養成課程の内容について理解を深める。さらに地域の小学校・幼稚園・保育園等を見学して、教育・保育の実際の比較検討を行うことを目的としている。(文責：太田雅子)

4. CASと本学の授業

IB DPのカリキュラムは6つのグループで構成される学習と、EE(Extended Essay 課題論文)・TOK(Theory of Knowledge 知識の理論)・CAS(Creativity, Activity, Service 創造性・活動・社会貢献)の3つから構成されている。ここでは、筆者が担当する「こどもと美術」「国際支援アクティブラーニング(以下、国際支援AL)」「地域支援アクティブラーニング(以下、地域支援AL)」の3科目をもとにCASに焦点を当ててその関連を報告する。

4-1. 「こどもと美術」とCASの関連

美術教育は、言うまでもなく感性や創造性を

育むものである。それも子供自身の表現欲求や衝動に根ざして行われることから、IB PYP (Primary Years Program 初等教育プログラム) の探究型授業と親和性が高い。

しかし、ともすると日本の幼児教育や初等教育現場では、教師は指導者として「指導する」ことが求められがちである。その結果、例えば造形遊びでは子供たちの遊びや学びを支援することが何よりも求められているのだが、結果としての作品の出来映えにこだわり、表現・製作方法を伝授・伝達、教授するような指導になりがちなのも事実である。このようなことから、IB PYP における教師の「ファシリテーター facilitator」としての役割を念頭に置いて教員養成課程での授業を展開することには、大きな意味があると言えよう。子供たち自らが創造する表現文化を共に創造したり、その活動を支援したりしていくような教師を養成したい。

とは言え、「指導する」教師像から抜け出すことは教育現場に身を置く現役教師でも容易ではなく、先の造形遊びに関しても小学校図画工作科における「未履修問題」を指摘する研究者は多い。このようなことから、学びを支援する「ファシリテーター facilitator」としての教師像を学生自らが体得し自らのものとするのが教員養成校においては何よりも重要であろうと考え、「教師も一人の学習者であること」を念頭に1年次生後期に開講する「こどもと美術」の授業をデザインしている。(文責：鈴木光男)

4-2. 「こどもと音楽」の目的について

「こどもと音楽」の目的は児童の遊びと学びの精神に溢れた音楽活動ができる環境を設定できるように必要な音楽の基本的知識と技能を身に付ける。具体的には音楽指導と実践に必要な楽典を学ぶことで音楽理論に関する知識を得る。また、器楽や歌唱による音楽表現を体験

し、その音楽的感覚を持って教育現場での音楽的活動の実践ができる技術を養うことである。

本科目は、理論、器楽、歌唱、音楽づくりの4つの柱から構成している。理論では、譜表、音名、リズム、音程、楽語、音階、調性などの学習を通して幼児教育者として必要な知識を身に付けることを目指している。器楽では、幼児教育や小学校教育の中で扱う世界の民謡、童謡などの弾き歌いの技術を修得する。歌唱では、本学の建学の精神であるキリスト教主義の教育に繋げている。音楽づくりでは、CMM(creative music making) を世界に広めたイギリスを代表する作曲家、音楽教育者であるジョン・ペインター (John Paynter 1931 - 2010) やサウンド・スケープを提唱しサウンド・エデュケーションを広めたカナダの作曲家・音楽教育者レイモンド・マリー・シェーファー (Raymond Murray Schafer) の理論をもとに学習者が主体となり音楽をつくる活動を実践している。

音楽の学習全般に共通することでもあるが、学習者は音に敏感であり、音を感覚的に捉えそれを何かの形で表現することができる力が必要である。特に幼児教育の養成校の学生にとりこのような力は教育の現場でも必要不可欠な要素と言える。これら保育者・教員養成校の学生にとって必要不可欠な学習要素である音の感受と創造性の二つの要素を同時に養うことができる学習がサウンド・エデュケーションなのである。

以下に授業内で実践したサウンド・エデュケーションの一例を示す。

- ①学習者は音楽室をスタート地点とし、大学構内地図を片手に構内をサウンド・ウォークする。
- ②サウンド・ウォークの最中に見つけた気に入りの音を名前とオノマトペを地図に書き込む。

- ③ 20分程度のサウンド・ウォークの終了後、採取した音をカテゴリーごとに整理する。
- ④ 採取した音の中からお気に入りの音を選ぶ。
- ⑤ 厚紙にマジックペンでお気に入りの音を絵や図で描写する。
- ⑥ クラスメイトの前で絵を見せ、描写した音について説明する。
- ⑦ クラスメイトが感想を伝える。

4-2-1. IB教育と「こどもと音楽」の関連性

「こどもと音楽」の授業では、基本的に学生が主体的に学べるよう授業を構成している。先述したサウンド・エデュケーションの実践例を振り返ると分かるように、このような活動では学習者が音を自ら見つけ、自ら音を傾聴し、音の微細な音色や、大きさなどを感受し、その音を起点に想像力を膨らませていくこととなる。例えば鳥の鳴き声1つをとってもその鳴き声には違いがあり、オス、メス、種類の違う鳥など挙げれば枚挙に暇がない。音の違いに気づき、その違いを知りたくなることは、学習者が主体でなければ成り立たない教育プログラムであろう。サウンド・エデュケーションは、学習者が主体となれるプログラムなのである。

このように学習者が主体的に学ぶことは、IB教育の教育目標の中にも示されており、関連性があると言えよう。今回は「こどもと音楽」の講義の概要とその中の取り組みについてほんの一例について触れたに過ぎない。今後は、掲載できていない学習者が創造的で主体的な学びの音楽に関する展開例を提示していきたい。

また、IB教育の中でも特にCASは中核を担う部分である。本科目ではCreativity, Activityの個所で親和性を見出すことができたのではないだろうか。今後は、TOKやEEと連動させた音楽に関する横断的な教育プログラムについて研究していきたい。(文責：二宮貴之)

4-3. 「国際支援・地域実践AL」とCAS

「国際支援AL」「地域実践AL」2科目は、まさにCASの「活動Activity・社会貢献Service」そのものと言える授業である。以下、それぞれの概要を紹介する。

4-3-1. カンボジアJHプロジェクト

「国際支援AL」では、ベトナム、ハワイなど3つのプロジェクトが準備されており、筆者はカンボジアJHプロジェクトの主担当となっている。このプロジェクトは、特定非営利法人ジャパンハート(以下、JH)が2016年に建設したカンボジア病院(以下、AAMC)を拠点として2020年度より2年次生を対象に開講するものである。このAAMCでは、診察や治療、またカンボジア人の医師や看護師など医療従事者の育成を無償で展開している。また、カンボジアをはじめとしてミャンマーやラオスなど医療の届かない地域へも医師・看護師を派遣し様々な医療行為を展開している。本科目プロジェクトは、この病院・事業スタッフと密接に連絡・連携を取りながら現地の医療・福祉・教育などの課題を把握して、学生なりに協働してその課題解決に取り組むものである。

このような活動は、まさにIBのミッション・ステートメントにある「多文化に対する理解と尊敬を通じて、よりよく、より平和な世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者の育成」という使命に直接的に合致するものと言える。

4-3-2. 聖隷SDGsプロジェクト

先の「国際支援AL」とは異なり本学周辺あるいは学内を中心にした地域に根ざした活動を展開するものが「地域実践AL」である。筆者は、その中でSDGsに関する活動を2019年度後期より3人の1年次生と取り組み始めている。

SDGsは17の目標があり、それぞれに分け

がたく 2030 年までの達成を目指し、世界のあらゆるところで取り組みがなされ始めている。日本国内においても同様に積極的な取り組みがなされ、学生が利用するカフェや用品店などでもプラスチックのストローやレジ袋を使わずに紙に切り替えるなどの動きが見られるようになってきている。また、多くの大学でも組織的な取り組みが始められ、先駆的な報告も数多く散見されるようになった。

まだ 2019 年度後期から取り組み始めたものではあるが、2020 年度 9 月の報告会に向けて学内を中心に積極的に調査や事業・提案を展開していく予定である。（文責：鈴木光男）

4-3-3. アダプテッド・スポーツ

「地域実践 AL」の「アダプテッド・スポーツ（以下 AdS）」では、地域の障がいを持つ方たちのスポーツ活動を支援する実体験を通して、共生、地域の課題解決について学んでいる。

浜松地域には「静岡バリアーズ」（車いすツイバスケットボール）、「浜松ボッチャ倶楽部 COOL」（ボッチャ）、「みんなでスポーツ教室」（様々な障がいを持つ方対象）などの活動が開催されている。これらの活動に主体的に参加し、ボランティアとして練習や競技のサポートをしたり、実際に練習に参加したりしていく。まさに、実体験からの学びであり、不自由さを抱えながらも生き生きとスポーツを楽しむ姿にむしろ励まされ、自分自身を振り返ることにもつながっている。（文責：和久田佳代）

5. 講演会・研修会・視察報告

5-1. 江里口歡人氏講演による IB 教育

こども教育福祉学科は、2019 年 10 月 19 日に玉川大学教育学部江里口歡人氏を講師に招き、IB 教育を学ぶ機会とした。江里口氏は、「グ

ローバル人材育成と IB」を表題とした講演を行った。講演内容は、次の章立てであった。

- (1) 日本の国際教育の変遷
- (2) 2000 年代の国際教育
- (3) グローバル人材とは
- (4) 国際バカロレア・プログラムのミッション・ステートメント
- (5) IB プログラム
- (6) 内発的動機付けと外発的動機付け
- (7) 自尊感情（セルフ・エスティーム）
- (8) グローバル人材育成に大切なこと

江里口氏は、国際バカロレアのミッション「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を強調した。続けて IB プログラムでは、「人をもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働き掛けている。」と、「同意」ではなく「共感」の大切さを語った。

最後の「グローバル人材育成に大切なこと」では、「グローバルに考え、ローカルに行動する」という言葉で結んだ。

新学習指導要領改訂の経緯である「予測困難な時代」をもたらす要因の一つに「グローバル化の進展」が挙げられている。IB は、その「グローバル人材の育成」を目標にしている。両者ともにグローバル化社会でも資質・能力を発揮できる人を目指しているのである

また、静岡県教員育成指標では「教育業務遂行力」の一部に「様々な教育課題」があり、その一つとしてグローバル人材の育成がある。IB プログラムで紹介された「IB の学習者像」が教員育成指標と関連する。それは、「探究する

人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りができる人」といった10の人物像であり、教員に求められる資質・能力と軌を一にしていると言えよう。よりよい授業をするには、理想とする授業に向けて日々の探究・振り返りや先輩教員から学ぶ姿勢が欠かせない。教員としての6つの資質・能力を高めるには、10の人物像で示される内容が不可欠と言える。

とは言え、現実には教員を目指す殆どの学生はローカル志向でグローバルな国際人とは遠いという指摘もある。しかし、江里口氏が最後に語った言葉に、IB教育で目指すグローバル人材の本質があるのではないだろうか。それは、資質・能力の3つの柱が目指す「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにする」というものである。正に三者が共通して目指すところと言えよう。

(文責：飯田真也)

5-2. プロジェクトアドベンチャー研修報告

2019年12月2・3日、難波克己氏を講師に迎え、プロジェクトアドベンチャー（以下PA）研修「人の心と体を育むアドベンチャーアプローチ」が開催された。

PAは「アドベンチャー」のもつ様々な特性を生かし、心の豊かさを育むことを目的とする。1970年頃、米国ボストンの公立高校の教師が中心となって始められたプログラムは、1995年に日本でもプロジェクトアドベンチャージャパンによって始められ、課題解決型体験学習法

として教育の分野で幅広く活用されている。

ここでは2日目に行われた聖隷クリストファーこども園年長児30名、聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科4年生35名、こども学科教員と聖隷クリストファー小学校教員予定者が加わったPAによる体験学習について報告する。

PAにおけるアドベンチャーとは、よく知られている野外のフィールドにおいてロープを使ってよじ登るような身体的に負荷の高い挑戦だけでなく、他者と関わり合ったり自分自身と向き合ったりする心の冒険（挑戦）も含んでいる。

難波（2016）は、アドベンチャー教育について「体験的な学習におけるグループワーク中心の活動を通して、人との関わりの中で自己認識、自己理解、他者理解、尊重、信頼を重視していくことを基本理念としたプログラムである。社会的な学習参加を通して、『個人・グループが進む道に対して自発的な目標を持ち、その達成を目指す進取的な活動に関わり、新たな自己成長を迎えていくための教育手法』」としている。

今回実施されたプログラムは、アスレチックのような「ロープスコース」ではなく、場所を選ばずにできる「アクティビティ」で、屋内のホールを使って行われた。

5-2-1. 実体験に基づく学び

実際に行われたアクティビティでは、実際に活動する中で動きながら質問をし、答え、考え、また動く。その中で、自己紹介をしたり、相手の名前を覚えたり、課題を解決したりしていく。子供たちや学生、教員が一緒になって体を動かしながら体験をし、その中から学んでいく。

PA研修からの学びは以下のとおりである。

①安心安全な場所であること

お互いに尊重し合い、みんなで安心安全な場

を作っていくことで、一人ひとりが挑戦し、成長できる環境が生まれる。野外でのアドベンチャーにおいては必然的に協力し合って安全な場を作っていかなければ危険が伴う。室内での活動においても同様に、協力し合いお互い安心できる場を作っていく。ALが導入・推進され、グループ・ディスカッションやグループ・ワーク等が多用されるとき、学び舎において「お互いに尊重し合い、みんなで安心安全な場を作っていく」ことが求められる。多様性を認め合い、尊重し合って、意見を出し合える場があることで、学びを深めることができる。

②実体験を振り返り、学びを深める

実体験と合わせて、体験の中での行動や発言を再認識し、起こっていたこと、事実を振り返り、解釈し、意味づけ、関連を見出す。さらに、次の行動にどのように応用していくかを考える。単に体験して終わらせるのではなく、仲間と振り返り意味づけをすることで、「体験からの学び」を得る機会となることが重要である。

大学での学修においても学びをリフレクションしていくことが求められている。本年度、DPルーブリックを用いた自己評価もスタートした。PAにおける体験学習のサイクルは実体験を振り返り、学びを可視化していくことができる。

③楽しむこと

どのプログラムも活動の中で自然と笑顔や笑い声が出て、幼児も大学生も生き生きとしていた。体を動かし、声を出し、笑い合う中で交流する「楽しさ」はもちろんのこと、課題を解決し、達成する「楽しさ」が含まれている。グループワークも違う意見を知り交流する「楽しさ」を基に、協力して課題を解決し達成する「楽しさ」が実感できるものである必要がある。

④失敗してもいい 自分で決める

アドベンチャーアクティビティの中で、挑戦することが求められる。そして「失敗してもいいから挑戦する」ことが強調される。実習以前の授業での演習やボランティア等を通して、自ら決めて失敗を恐れずチャレンジし、チャレンジするからこそ学べることを実感しておくことが必要である。

⑤身体を使った自己表現、コミュニケーション
身体を使って動きのある体験が多いため、身体を使った自己表現、コミュニケーションが生まれる。アクティビティの中で、課題を達成するために、他者との同時発声や同時動作が求められる。「いき」を合わせようとし、「いき」が合う体験ができる。このことによって、コミュニケーションが深まる。相手を信頼しなければできないし、達成することでさらに信頼関係が深まる。

5-2-2. 指導者ではなくファシリテーター

PAにおいて、教員は指導者ではなく、ファシリテーターである。難波（2007）はファシリテーション（PAを実施する際の関わり方）について、以下のように述べている⁷。

- 1) これから起こる体験について、学習者に何かしらの気づきを促す
- 2) 体験をしているときに新たな発見や気づきから変化を意識させ助長する
- 3) 活動を終えた時点で、振り返り、分析、解説や体験について話し合う機会を提供
- 4) 体験の中で起こった変化をその後の日常生活の中でどのように活かして取り組んでいくか、変化を自覚する方向に向ける

実際に難波氏のファシリテートは上記のような流れで行われていた。加えて「終わり方」についての工夫が参考になった。それは、「終わりの時間、終わり方を先に確認する」というものである。

子供たちには「長い針が12を指したら終わりだよ」と伝えてから、プログラムに入っていった。また、アクティビティを始める前に「これが終わりの合図」（今回は両手をあげる）と終わり方を先に伝達していた。

夢中になって集中していて、急に「終わり」と告げられると、楽しい気持ちから切り替えるのが難しく、せっかくの楽しさが覚めてしまうことがある。先に終わりの時間を確認し合い、また終わりの合図を決めておくことで、場面の切り替えを主体的にとらえることにつながる。

5-2-3. まとめ

聖隷学園は「キリスト教精神に基づく隣人愛」を基盤に、他者と協働しながら少子高齢社会における課題を解決する人材を育成する使命を持ち、医療・福祉・教育の場では実体験が重要となる。PAによるアプローチは、教育の様々な場面で活用できるものである。

PAの考え方や手法は、ALの効果を高めるものであり、企業研修にも取り入れられていることから、これからの答えのない時代を生き抜いていく子供たち、児童・生徒・学生にとって有用であり、この手法を積極的に学び、取り入れていくことが、信頼関係の構築や主体的な学びにつながると考えられた。(文責:和久田佳代)

5-3. オキナワインターナショナルスクール視察

5-3-1. OIS がめざすもの

オキナワインターナショナルスクール(以下、OIS)は、沖縄県那覇市(小学部、中学部は2019年7月に南城市に移転)にあり、在園在校者は0歳児から中学3年までの約160名である。OISは、2011年7月にPYP(初等教育課程)、2016年7月にMYP(中等教育課程)の認定を取得している。

5-3-2. 保育部・幼稚園部の教育

保育部は2歳児を中心に、遊びを通して認識

力・創造力・協調性を学び、幼稚部から始まるIBへスムーズに移行していくプログラムが組まれている。「ウィークリープログラム」と名付けられ、アルファベットや数、形、色など遊びを通して日替わりに学んでいる。

幼稚部は3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスの3つのクラスに分かれており、外国人教師と日本人教師とのチームティーチングが行われている。幼稚部での特質は、小学部へのつながりとして毎日さまざまな「しらべ学習(探究活動)」に取り組むことだ。また英語・算数・音楽・アートなど複数の教科を横断して学習している。さらに5歳児クラスでは、各自にタブレット端末機を持たせ、情報社会に即応できる環境を整えている。

5-3-3. 小学部の教育

小学部はIBにおけるPYPの中・後期にあたる。幼稚部と同様、外国人教師と日本人教師がチームを組み、共に、児童の言語レベルや教科内容に応じた計画を立てている。英語での授業は、外国人教師が主となり、日本人教師はサポートに徹する。これは、英語の環境を整える意図がある。児童が英語環境の中でも日本人教師に頼りすぎないようにとの配慮である。

英語力のレベルについては、英語をただ話せるだけではなく、英語を自在に使いこなして自分の意見を伝えたり、討論し合ったり、記述までもできる能力を目標としている。

英語中心の教育でよく問題となる国語力に関しては、国語科を設定していることは勿論のこと、「探究型授業」を、バイリンガルで学んでいる。これは、第一言語である日本語を高めることで、英語力の向上につなげるという相乗効果をもねらっている。また、英語力、国語力の習熟度に差が出てくることは当然のことだが、「言語サポートクラス」を設けている。

「探究型授業」は週6時間、「自主探究」が週3時間、計9時間である。さらに英語の全6時間は、ただ単に言語として学ぶのではなく、「探究型授業」として学んでいる。つまり、探究型が合計15時間設定されているといえるのだ。

5-3-4. 中学部の教育

小学部でPYPを通して学んできた知識技能をさらに深めるためにMYPに取り組む。教育方針としては「包括的学習」、「多文化理解」、「コミュニケーション」の3つの分野からなる。

中等部ではPYPでの横断的な学習モデルから、教科学習と学際的学習モデルへと移行する。このカリキュラムは、各クラスの担任とカリキュラムコーディネータが協働で教材研究し、指導計画を立てる。

英語力に関しては、授業の大半が英語で進められる。そして生徒全員が英検を受験し、準1級をめざす。TOEFLにおいては、ハイスコアを目標とする。

5-3-5. 視察を終えて

小学部で特筆すべきことは、文章表現が長けていたことだ。4学年の作品を読んだが、起承転結がしっかりしていること、書き言葉の文体が徹底されていること、自分の考えを論理的に述べられていることなど全体的な傾向として見られた。また、調べ学習でのまとめは、解釈した自分の言葉で述べられているところに主体性、論理性を見ることができた。

これらの要因は、探究型授業で行われる、「動機付け」→「情報集め」→「整理」→「結論」→「深める」→「行動」という「探究サイクル」を体験的に学習しているからだろう。さらに、「深く広く社会を探究する」ことへの高い評価が、「探究サイクル」の学習を活性化させているとも言えるであろう。

リーダーとしてのIBコーディネータの存在

は欠かせないが、各教師もIB研修を率先して受講していることもあげられる。つまり、システムはできたとしても、IBを理解できる教師がいなければ始まらないということだ。IBを進めるにあたって人材育成が課題ではないかと考えている。(文責：福重浩之)

6. おわりに

ここまでIB教育と我々こども教育福祉学科が目指す授業像との関連、あるいはまた本年度取り組んできた講演会や研修会、また視察などについて報告をしてきた。これらをもとに本学科教員でIBに対する理解を深め、本学ならではのIB教育像を明確に共有していくことが求められる。今回のこの報告を第一歩としたい。

(文責：鈴木光男)

引用文献

- 1 佐藤学 (1999) 『教育の方法』 放送大学振興会 p.35
- 2 国際バカロレア機構 (2014) 『国際バカロレア (IB) の教育とは?』 国際バカロレア機構 「IBの使命」
- 3 前掲書 (2) 「IBの使命」
- 4 前掲書 (1) p.36
- 5 前掲書 (2) p.6
- 6 難波克己 他 (2016) 「TAPにおけるアドベンチャーに関する諸理論に対する再考察」 『玉川大学 TAP センター年報 (1)』, P.21-37
- 7 難波克己 他 (2007) 「体験学習におけるプロセシングの重要性について」 『玉川大学学術研究所紀要 13』 P.73-80

参考文献

1. プロジェクトアドベンチャー・ジャパン (2005)

『グループのちからを生かす：成長を支えるグループづくり：プロジェクトアドベンチャー入門』みくに出版

2. 諸澄敏之 (2005) 『みんなのPA系ゲーム243.』杏林書院
3. 安田 賢憲 他 (2013) 「プロジェクト・アドベンチャーを援用したアクティブ・ラーニングの可能性 -グループ演習での実践を通して」『学士課程教育機構研究誌 (2)』創価大学学士課程教育機構, P. 33-47